

総括質問

日本思想史学会創立五〇周年を記念して昨年を引き続いて行われたシンポジウムのテーマは、「日本思想史学の現在と未来」である。大会委員会はこのテーマに、日本思想史という学問の持つ国際的視点と現代社会へのメ

ッセージ性を再発見し、その豊かな可能性を引き出そうとする意図を込めた。また、これまで日本列島上で行われてきた思想的営為が決して過去の遺物ではなく、現代においても積極的意義を持つ点を明らかにすべく、それが各時代の抱える歴史的課題に対する人々の対応であることを解明しようと試みた。「古代から中世へ」「中世から近世へ」「近世から近代へ」という切り口で時代の転換期を取り上げたのは、そうした意図に基づくものであ

る。私は、三本の報告のうち、富樫氏・頼住氏の二つを主として取り上げ、総括質問としての責を果たさせていただくことにしたい。

佐藤 弘夫

まず、富樫進氏の「古代から中世へ——行基像の変容とその思想的意義」について論じる。この報告は、「行基文殊化身説」を素材として、それが古代から中世への転換の中でどのような変容をみせたかを考察したものである。史料として『日本霊異記』『三玉絵』『扶桑略記』という三つのテキストを用い、そこに描かれた行基像の変貌を辿るといふ形をとった。

「自土の奇しき事」＝霊験譚の収集を目的とした九世紀初頭の『日本霊異記』では、行基が文殊の化身である

ことは、大部屋栖野古という一人物が仮死状態において確認したこととして描かれており、他の人物は関わっていない。ところが一〇世紀末の『三宝絵』になると、東大寺供養の折に行基が難波に婆羅門僧正菩提僊那を迎えて和歌を唱和する中で、行基が文殊の化身であることが明らかに。菩提僊那という外国人がストーリー内部に不可欠の要素として組み込まれ、仏教（東流）に伴う天竺仏教と中国仏教の衰微、そして日本仏教の興隆への確信という広い文脈の中で行基文殊化身説が説かれるようになるのである。

しかし、富樫氏によればそこではまだ天竺僧としての菩提僊那が、物語のなかで有効な機能を果たすには至っていないという。一一世紀末の『扶桑略記』に至って、奄然のごとき国境を超える巡礼僧の姿が菩提僊那に投影されることによって、肉親や故郷を捨てて文殊を思慕する菩提僊那の人物像が生き生きと描かれるようになり、行基の文殊化身説にリアリティを付与するに至る。文殊菩薩の感見が菩提僊那の来日の真の目的とするこの説話が、中世に広く流布して行くのである。

富樫氏は、こうして行基文殊化身説が中世に向けて日本を超えた三国の広がりにおいて説かれるようになることを明らかにするが、それは一方で、まったく逆方向に

みえる内向きの信仰を呼び覚まして行くことを指摘する。この時期、五台山の一部が日本に飛来して吉野・金峰山となったという説話が流布する。これは東アジア世界の政治的緊張によって天竺・五台山が聖地としての求心力を失ったことと表裏をなす現象であり、中世における神国思想や三国観にみられる日本中心主義につながって行くことを示唆するのである。

富樫氏の発表は、多彩な史料を用い、それを精緻に読み込んでいく作業の上に組み立てられたきわめて高いレベルの内容であり、今回の論証そのものに関してはいま一つ隙を見出すことはできなかった。その上での質問であるが、第一に、「要旨集」で予告された「滅罪・懺悔の対象としての文殊像」から「社会福祉的利他行の実践者としての文殊像」への転換というシエーマについて、今回は十分展開されることはなかったが、この発表内容とどのように関わるのかについてももう少し知りたいと思った。中世に向けての文殊のイメージの変容は大変興味深い指摘であるだけに、ご教示いただければ幸いである。

第二に、「三国伝来」の観念が流通し、世界観がアジアへと広がって行くようにみえる中世成立期において、日本中心的な史観が根を下ろして行くという指摘はさわめて刺激的であった。ただ、この時期は一方では浄土信

仰や密教の革新運動が生起し、人々の間に定着していくときでもあった。いわゆる「鎌倉仏教」に看取しうるように、人種や性別による差別を設けない普遍的な救済理論も提示されるようになる。日本中心主義の志向と普遍的な救済理論の模索、古代から中世にかけての相反するようにみえるこの二つの動きをどのように統一的に解釈すべきか、見通しをご披露いただければと思う。

頼住光子氏の「中世から近世へ——道元の時間論から見た卍山道白における「復古」について」（報告原題）は、江戸前期の曹洞宗を代表する僧侶である卍山道白に焦点を合わせ、その改革運動がどのような歴史的・思想的意味をもつかを考察したものである。

卍山は教団改革を推進するにあたって、曹洞宗の原点としての道元に帰るべきことを主張し、しきりに「復古」を提唱した。中世の禪宗においては、対面して直接師から相承を受ける「人法」ではなく、各寺院に伝わる法脈を受け継ぐ「伽藍法」が主流となっていた。その背景には、各寺院の相対的な自立度が高かった中世固有の宗派組織のあり方が存在した。卍山はこれを真っ向から批判し、多元的な伽藍法をやめて、起点としての道元に始まる単一の宗統に一本化した上で、面授によるその相承を主張した。卍山にとっては、この方法こそが道元本

来の意図に叶うものとみえたのである。

卍山の宗統復古運動は、曹洞宗における中世的な多元性の喪失を加速化させた。卍山は祖師道元を至上視して復帰すべき唯一の原点と規定したが、中世の曹洞教団では道元以外にも如浄や栄西など帰るべき複数の原点を有することが普通のあり方だった。卍山が試みた改革は、彼自身の主観からすれば教団を道元の時代まで引き戻そうとする復古の試みだった。しかし、客観的な視点から見れば、その運動の根底には近世的な発想が通底しており、それは道元の思想に反する内容を含むものだった。

卍山の改革は彼の意図とは別に、曹洞宗の各寺院を近世にみられる一元的な本末関係に組み込んでいく役割を果たすことになったのである。

頼住氏は卍山の「復古」を掲げた活動が、実際にはむしろ教団の近世的体制への移行を後押しする役割を果たしたことを明らかにされた。これ自体きわめて重要な指摘であるが、頼住氏はさらに踏み込んで、卍山の「復古」の背景にある時間論が道元とはまったく異質なものになっていると主張する。

頼住氏によれば、道元以来の絶えることのない相承を重視する卍山にとって、時間とは原点としての道元から現在まで直線的に持続する時間だった。またある時点で

まで到達しても、そこから原点へと回帰可能な「循環的な時間」にほかならなかった。道元の時間論は、この円山のそれとは似て非なるものであった。道元の場合、時空を超越した真理の世界が宇宙の根源に実在することが前提とされていた。あらゆる存在がいま、ここにおいて原点としての悟りの世界を体現しているのである。その真理に手を触れる可能性は、すべての人間に開かれている。頼住氏によればこのような道元の思考方法が、原点を一元化することを拒む役割を果たしたのである。

以上のような考察を踏まえて頼住氏は、日本列島にかつて実在した複数の時間意識を発掘することによって、丸山真男氏が「歴史意識の「古層」」として論じたような、特定の時間意識が列島の歴史を通底するとみる一元的な時間論を相対化し、より多彩で重層的な思想像を構築していく可能性について論究されるのである。

頼住氏の発表も富樫氏同様、丹念な史料の読みを踏まえた重厚な論証がなされており、その結論について異論を挟む余地はない。円山という僧侶の改革運動が、「復古」というその主観的な意図とは裏腹に、曹洞教団の近世化を推し進める結果となったという指摘はきわめて興味深い。また、道元と円山の時間論の異質性をクリアに指摘したことも、本発表の重要な成果である。

以上のように総括した上で、頼住氏の発表をめぐって議論を深めるために質問したい点は、この発表内容を禅宗以外の教団の同時期の動きとどのように関係づけ、いかに全体的な時代像を構築していくかという問題である。一例を挙げれば、天台宗においては近世初頭に、中世に全盛を極めていた本覚思想に対する本格的な批判が開始される。その動きは天台宗以外にも及び、多くの教団の教学から中世的な口伝法門にもとづく文献が排除されていく。私には、曹洞宗における直線的に「持続」する時間の採用と同時代の各宗にみられる「実証的」な文献批判の導入が、近世という時代を超えて、二つながら近代的な思惟様式への接近のようにみえてならない。頼住氏が論じた中世―近世移行期の思想運動が、同時に列島の思想が近代的な方向に足を踏み出す第一歩のようにも感じられるのである。こうした私的な感想について、頼住氏のご意見をお聞かせいただければ幸いである。

今回の富樫・頼住両氏の発表では、原点の精密な読みを踏まえた緻密な論証が示された。いずれの発表も伝統的な日本思想史学の方法を踏まえた説得力のある内容であり、当該テーマに関して、現在のこの学会が提示する最良の成果といつてよいであろう。またどちらの発表も、時代をまたいだ思想史像の変容の解明という編集委

員会の意図にきちんと応えており、パネラーとしての役割を十二分に果たしていただいたと私は考えている。

今後の課題は、それぞれの発表のところででも述べたが、お二人の指摘をより広いコンテクストのなかにどうのよ
うに位置付けていくかという問題である。この会場に参
集された研究者の皆様がこの点について、それぞれの視
点から積極的に発言され、さらに今日という限定された
日を超えて、これを共通の課題として議論を深めていけ
れば幸いである。その議論の深化のなから、日本思想
史という学問分野とそれを包摂する人文科学という領域
でなされる研究が、「日本」という領域を超えて今日的
な課題に対して何をなしうるかという問題への解答も、
おのずから浮かび上がってくると私は考えている。

(東北大学教授)